

古事記 四  
2016年12月29日

原文： 岩波文庫 古事記

現代語訳： 岸本陸一 （素人が古事記を普通に読む試み。多分日本人なら誰でも読めるはず。高校で漢文習ったんだから大丈夫なはず。）

## 伊邪那岐命と伊邪那美命 後半

故爾伊邪那岐命詔之、愛我那邇妹命乎（那邇二字以音、下效此）謂易子之一木乎、乃匍匐御枕方、匍匐御足方而哭時、於御淚所成神、坐香山之畝尾木本、名泣澤女神。故、其所神避之伊邪那美神者、葬出雲國與伯伎國堺比婆之山也。

子供一人のために愛しい妻を失ってしまった、とイザナキが言った。亡骸の枕元に腹ばいになって泣き、足の方に腹ばいになって泣いた。涙から生まれた神は香久山の畝尾の木の本にいて、ナキサハメの神という。イザナミの亡骸は出雲国と伯耆国の境の比婆の山に葬られた。

於是伊邪那岐命、拔所御佩之十拳劍、斬其子迦具土神之頸。爾著其御刀前之血、走就湯津石村、所成神名、石拆神、次根拆神、次石筒之男神。（三神）次著御刀本血亦、走就湯津石村、所成神名、甕速日神、次樋速日神、次建御雷之男神、亦名建布都神（布都二字以音、下效此）、亦名豊布都神。（三神）次集御刀之手上血、自手俣漏出、所成神名（訓漏云久伎）、闇淤加美神（淤以下三字以音、下效此）、次闇御津羽神。

上件自石拆神以下、闇御津羽神以前、并八神者、因御刀所生之神者也。

イザナキは腰に挿した長い剣（十拳剣）を抜いて、生まれた時に母イザナミを火傷させて死なせた子であるカグツチの首を切った。刀の先の血が岩に付いて生まれた神がイハサク、次にオサク、次にイハツツノヲ。刀の根元の血が岩に付いて生まれた神がミカハヤヒ、次にヒハヤヒ、タケミカツチノヲ、またの名はタケフツ、またの名はトヨフツ。刀の柄の血が手から滴って生まれた神がクラオカミ、クラミツハ。

イハサクからクラミツハマまでの八神はイザナギの刀から生まれた神である。

訳者注： 居眠り防止のグロ脚色が続きます。母が出産時に死ぬ原因となった子を父が斬り殺すなんてひどい、と思って読者が目を覚ます期待しているとしか思えません。

所殺迦具土神之於頭所成神名、正鹿山上津見神。次於胸所成神名、淤騰山津見神。（淤騰二字以音）。次於腹所成神名、奥山上津見神。次於陰所成神名、闇山津見神。次於左手所成神名、志藝山津見神。（志藝二字以音）。次於右手所成神名、羽山津見神。次於左足所成神名、原山津見神。次於右足所成神名、戸山津見神。（自正鹿山津見神至戸山津見神、并八神）。故、所斬之刀名、謂天之尾羽張、亦名謂伊都之尾羽張。（伊都二字以音）。

殺されたカグツチの頭から生まれた神がマサカヤマツミ、胸からオドヤマツミ、腹からオクタマツミ、陰部からクラヤマツミ、左手からシギヤマツミ、右手からハヤマツミ、左足からハラヤマツミ、左足からトヤマツミ。マサカヤマツミからトヤマツミまで八神。斬った刀の名前はアメノヲハバリ、またの名はイツノヲハバリ。

訳者注： 天皇家の親族を斬り殺しても無駄だよ。屍から即座に8神も生まれて来るんだから。神なのだから人間のように死なないのよ。と主張しているように読めます。

於是欲相見其妹伊邪那美命、追往黄泉國。爾自殿騰戸出向之時、伊邪那岐命語詔之、愛我那邇妹命、吾與汝所作之國、未作竟。故、可還。爾伊邪那美命答白、悔哉、不速來。吾者爲黄泉戸喫。然、愛我那勢命那勢（二字以音、下效此）。入來坐之事恐。故、欲還、且與黄泉神相論。莫視我。如此白而、還入其殿内之間、甚久難待、故、刺左之御美豆良（三字以音、下效此）。湯津津間櫛之男柱一箇取闕而、燭一火入見之時、宇士多加禮許呂呂岐弓。（此十字以音）、於頭者大雷居、於胸者火雷居、於腹者黑雷居、於陰者拆雷居、於左手者若雷居、於右手者土雷居、於左足者鳴雷居、於右足者伏雷居、并八雷神成居。

亡き妻イザナミにもう一度会いたいと思い、イザナキは黄泉の国に行った。閉じられた神殿に向かってイザナギは語りかけた。「愛する妻よ、二人の国はまだ作り終わっていない。帰ってきてくれ。」イザナミが答えた。「悔しい、あんた来るのが遅いのよ。私は黄泉の国の食べ物を食べちゃったから、もう帰れない。でも、私だってまだ愛してるわよ。できれば帰りたい。黄泉の国の神様にかけあってみから、決して今の私を見ないでね。」イザナキは真っ暗な神殿の中で長い間待たされた。何も見えないのに耐えきれず、左の髪に挿した櫛の端の太い歯を折って火をつけた。これは黄泉の国のタブー。そこに見えたのは腐ってウジ虫がたかった無残なイザナミの姿。体には八柱の雷神がいた。

訳者注： タブーを犯してのぞき見したら、ウジ虫が湧いた恐ろしい姿があった、というのは忘れがたい強い印象を残します。宇士多加禮許呂呂岐弓（ウジタカレコロロキテ）（蛆虫が口のまわりにもいて、うまく話せない）が仮名表記されているのも効果的。漢文では恐ろしさが伝わらないと思います。

於是伊邪那岐命、見畏而逃還之時、其妹伊邪那美命、言令見辱吾、即遣豫母都志許賣（此六字以音）令追。爾伊邪那岐命、取黑御鬘投棄、乃生蒲子。是搯食之間、逃行、猶追、亦刺其右御美豆良之湯津津間櫛闕而投棄、乃生筍。是拔食之間、逃行。且後者、於其八雷神、副千五百之黄泉軍令追。爾拔所御佩之十拳劍而、於後手布伎都都此四字以音逃來、猶追、到黄泉比良（此二字以音）坂之坂本時、取在其坂本桃子三箇待擊者、悉逃逝也。爾伊邪那岐命、告其桃子汝如助吾、於葦原中國所有、宇都志伎（此四字以音）青人草之、落苦瀨而患惚時、可助告、賜名號、意富加牟豆美命。（自意至美以音。）

イザナギは恐ろしいものを見て逃げ帰ろうとした。その時、イザナミは「我に辱見せつ」（タブーを破って盗み見したのが悪いと言っているのか、それとも逃げ帰ろうとした夫の態度が悪いと言っているのか不明）と言って、黄泉醜女に追いかけてさせた。イザナギは黒御鬘（蔓草の王冠、ひょっとしたらアデランスかも）を投げ捨てれば、そこに葡萄の実となった。醜女これを拾って食べている間に逃げた。なお追いかけて来るので、右の髪に挿した櫛を投げ捨てると（アデランスではなかったようです。あるいは頭頂部以外には髪があったのかも）、たちまち筍になった。醜女これを抜いて食べる間に、逃げた。その後、八柱の雷神が1500人の黄泉軍を従えて追いかけてきた。十拳剣を抜いて後ろ手で振りながら（呪いをかけながら）逃げたが、まだ追ってくる。黄泉比良坂の坂本まで来た時、桃の実を三個投げつけた、追手は全部退散した。イザナギは桃に言った。「私を助けてくれたのと同じように、葦原中國（現実世界）で人々が苦しんでいる時、助けて欲しい。」と言って、オホカムズミの命をいう名を与えた。

訳者注： 黄泉の国は琵琶湖以北の北陸山陰地方のことだと思います。つまり黄泉の国は近江の国。まだ大和朝廷が琵琶湖以北を支配できていない時の話。イザナミは多分琵琶湖、若狭湾、日本海経由で出雲国と伯耆国の境にイザナミを葬ったのだと思います。そこは多分イザナミの出身地。黄泉軍に追われ

て比良の坂本（琵琶湖の南西岸）まで来た時、桃（多分藤原氏のこと、あるいは唐）の援軍が到着します。

（古事記が書かれたころ、天皇家の本拠地である「畿内」に近江の国が含まれなかったこと、政敵である天智天皇が坂本の近くに都を移した事に対する非難があったであろうこと、黄泉と近江の発音が似ていること、桃(tao)、藤(teng)、唐(tang)（日本語では全部トウ）の発音が似ていること、などからの推測）

というより、ドタバタ喜劇と見た方がいいかも。投げられた食べ物をつい食べてしまう追っ手に全く真剣さが感じられません。

最後其妹伊邪那美命、身自追來焉。爾千引石引塞其黄泉比良坂、其石置中、各對立而、度事戸之時、伊邪那美命言、愛我那勢命、爲如此者、汝國之人草、一日絞殺千頭。爾伊邪那岐命詔、愛我那邇妹命、汝爲然者、吾一日立千五百産屋。是以一日必千人死・一日必千五百人生也。故、號其伊邪那美神命謂黄泉津大神。亦云、以其追斯伎斯（此三字以音）而、號道敷大神。亦所塞其黄泉坂之石者、號道反大神、亦謂塞坐黄泉戸大神。故、其所謂黄泉比良坂者、今謂出雲國之伊賦夜坂也。

最後にイザナミが自ら追ってきた。イザナキは千人で引くほどの大きな岩を置いて黄泉比良坂を封鎖した。この岩を挟んでイザナギが最後の別れを言うと、イザナミが言葉を返した。愛しい夫よ、かくなる上は、あなたの国の人民を一日に千人絞め殺してやる。イザナギは言った、愛しい妻よ、うちの国では一日に千五百人生まれるように少子化対策はバッチリ。千人くらい絞め殺されても大丈夫。イザナミを黄泉大神と名付けた。またの名を道敷大神。黄泉の坂に置いた石を道反之神と名付けた。またの名を黄泉戸大神。黄泉比良坂は、今、出雲の国の伊賦夜坂と言う。

訳者注： あれ、黄泉比良坂は琵琶湖南西岸ではなかったんですね。出雲の国の伊賦夜坂という地名は現在は存在せず、どこなのか分からないようです。後世の人が、それならうちの近所にするべ、と名付けたのかもしれませんが。あるいは、出雲の国が今よりずっと大きく、琵琶湖まで支配していたのかもしれませんが。はたまた、琵琶湖周辺で生まれ、北陸で育ったと言われる継体天皇一族との争いのことを言っているのかもしれませんが。

是以伊邪那伎大神詔、吾者到於伊那志許米上志許米岐（此九字以音）穢國而在祁理（此二字以音。）故、吾者爲御身之襖而、到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐（此三字以音）原而、襖被也。

イザナギ大神（ここで命から大神に昇進？）が言った。私は穢れた（イナシコメシコメキ）国に行ってしまったから、水で身を清めよう。竺紫の日向之橘小門之阿波岐原（所在不明だが宮崎には違いなさそう）にて襖被いを行った。

故、於投棄御杖所成神名、衝立船戸神。次於投棄御帶所成神名、道之長乳齒神。次於投棄御囊所成神名、時量師神。次於投棄御衣所成神名、和豆良比能宇斯能神。（此神名以音。）次於投棄御禪所成神名、道俣神。次於投棄御冠所成神名、飽咋之宇斯能神。（自宇以下三字以音。）次於投棄左御手之手纏所成神名、奥疎神。（訓奥云於伎。下效此。訓疎云奢加留。下效此。）次奥津那藝佐毘古神。（自那以下五字以音。下效此。）次奥津甲斐辨羅神。（自甲以下四字以音。下效此。）次於投棄右御手之手纏所成神名、邊疎神。次邊津那藝佐毘古神。次邊津甲斐辨羅神。右件自船戸神以下、邊津甲斐辨羅神以前、十二神者、因脱著身之物、所生神也。

イザナギが投げ捨てた杖から生まれた神がツキタツフナド。帯からはミチノナガチハ。袋からはトキハ



カシ。着物からワヅラヒノウシ、袴からチマタ、冠からアキグヒノウシ、左手の装身具からオキザカル、オキツナギサビコ、オキツカヒベラ、右手の装身具からヘザカル、ヘツナギサビコ、ヘツカヒベラ。ツキタツフナドからヘツカヒベラまで12神はイザナギが身に付けていたものを脱ぐことによって生まれた神である。

訳者注：前の六神が陸路の神であり、後の六神が海路の神であることから、イザナギが黄泉の国から逃げ帰る途中で交通不便で苦勞したのではないかと思います。海上交通の確保、街道の整備という課題に既に気付いていたようです。これを実現するには江戸時代まで千年ほど待たなければなりません。

於是詔之、上瀬者瀬速、下瀬者瀬弱而、初於中瀬墮迦豆伎而滌時、所成坐神名、八十禍津日神（訓禍云摩賀、下效此。）次大禍津日神。此二神者、所到其穢繁國之時、因污垢而所成神之者也。次爲直其禍而所成神名、神直毘神。（毘字以音、下效此。）次大直毘神、次伊豆能賣神。（并三神也。伊以下四字以音。）次於水底滌時、所成神名、底津綿津見神、次底筒之男命。於中滌時、所成神名、中津綿上津見神。次中筒之男命。於水上滌時、所成神名、上津綿上津見神（訓上云宇閑）次上筒之男命。此三柱綿津見神者、阿曇連等之祖神以伊都久神也。（伊以下三字以音、下效此。）故、阿曇連等者、其綿津見神之子、宇都志日金拆命之子孫也。（宇都志三字、以音。）其底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命三柱神者、墨江之三前大神也。

イザナギは穢れを祓い身を清めるため、水に入った。上瀬（上流？）は早すぎるし、下瀬（下流？）は弱すぎるので中瀬（中流？）に入った。その時生まれた神がヤソマガツヒ、オホマガツヒ。この二神は黄泉の国の穢れの垢から生まれた。次の黄泉の国の禍を直そうとして生まれた神がカムナホビ、オホナホビ、イズノメ。水の底で禊するとき生まれた神がソコツワタツミ、ソコツツノヲ、中くらの深さで禊ぐとき、ナカツワタツミ、ナカツツノヲ、水の上の方で禊ぐとき、ウハツワタツミ、ウハツツスノヲ。三柱のワタツミ神はアズミノムラジ等の祖先神として祭られている。アズミノムラジ等はワタツミ神の子のウツシヒガナサクの子孫。ツツノヲ三柱は摂津の住吉の神。

訳者注： 地味な神様が続きますが、この後いよいよスターが登場します。

於是洗左御目時、所成神名、天照大御神。次洗右御目時、所成神名、月讀命。次洗御鼻時、所成神名、建速須佐之男命。（須佐二字以音。）

右件八十禍津日神以下、速須佐之男命以前、十四柱神者、因滌御身所生者也。

此時伊邪那伎命、大歡喜詔、吾者生生子而、於生終得三貴子、即其御頸珠之玉緒母由良邇（此四字以音、下效此）取由良迦志而、賜天照大御神而詔之、汝命者、所知高天原矣。事依而賜也、故其御頸珠名、謂御倉板擧之神。（訓板擧云多那。）次詔月讀命、汝命者、所知夜之食國矣、事依也。（訓食云袁須。）次詔建速須佐之男命、汝命者、所知海原矣、事依也。

ここで、イザナギが左目を洗った時に生まれた神の名は天照大神。右の目を洗うと月読命（ツクヨミ）、鼻を洗うと建速須佐之男命が生まれた。

八十禍津日神から建速須佐之男命までの14神は、イザナギが身をすすぐことによって生まれた神である。

この時イザナギが大いに喜んだ。今までたくさん子供を産んだが、最後に三柱の優秀な子供を得た。首飾りから玉を取ってアマテラスに与え、高天の原を治めよと言った。この玉とミクラタマの神という。月読は夜の世界を治めよ。スサノオは海を治めよ。

訳者注：岩波文庫の注釈では、類似の伝説が中国の五運暦年記にあるという。「啓陰感陽、布布元氣、乃孕中和。是為人也。首生盤古、垂死化身。氣成風雲、声成雷霆、左眼為日、右眼為月」

現代文では「治める」としましたが、原文では「所知」です。その場所を知ることが、治めることと同義だというのは分かります。知事という言葉とも関係ありそうです。

岩波文庫では、建速須佐之男命を「勇猛迅速に荒れすさぶ男神、嵐の神」との注釈がありますが、ちょっと分かりにくいです。漢字をそのまま解釈して、「仕事の速い土建業の神」でいいと思います。

故、各隨依賜之命、所知看之中、速須佐之男命、不知所命之國而、八拳須至于心前、啼伊佐知伎也。（自伊下四字以音。下效此。）其泣狀者、青山如枯山泣枯、河海者悉泣乾。是以惡神之音、如狹蠅皆滿、萬物之妖悉發。故、伊邪那岐大御神、詔速須佐之男命、何由以、汝不治所事依之國而、哭伊佐知流。爾答白、僕者欲罷妣國根之堅洲國。故哭。爾伊邪那岐大御神大忿怒詔、然者汝不可住此國、乃神夜良比爾夜良比賜也。（自夜以下七字以音。）故、其伊邪那岐大神者、坐淡海之多賀也。

アマテラスとツキヨミが命じられた通り高天原と夜の国を治めたのに対し、スサノオは海原を治めず、長い髭がびちょびちょに濡れるまで泣いていた。泣く様子は青山が枯れ果て、川の水が干上がるほどだった。あんまりスサノオの鳴き声がうるさいので、騒音被害が深刻だった。イザナギがスサノオに言った。なんでお前は命じられた國を治めず泣いてばかりいるのか？ スサノオが答えた。僕は母の国根の堅洲国に行きたいので泣いているのです。イザナギは激怒し、それならこの国から出て行きなさい。追放だ。そう言い残してイザナギが死に、近江の多賀に座した。

訳者注：ストーリーが混乱しています。母は黄泉の国にいるはず。根の堅洲国と同じなの？ 出雲の国と伯耆の国の境に葬られたから場所は根の堅洲国なのか？ 母は生前オノコロ島に降臨したはずだから、オノコロ島に行きたいのか？ 天国を追放したら、黄泉の国＝根の堅洲国＝出雲の国と伯耆の国あたりなのだから、スサノオの希望通りなんじゃないの？

要するに、古事記は読者が都合の良いように解釈してください。と言っているわけです。これは現代の歌謡曲やポップスの歌詞でも良く使われる技法。聞く人が勝手に自分の経験にあてはめて共感してしまうのですが、それが狙いなのです。

近江出身の私は、黄泉の国＝近江の国＝根の堅洲国と考えます。イザナミが死んだ時には畿内と黄泉の境が坂本のあたりにあったが、イザナギが死んだ頃には彦根のあたりに移っていた。イザナギは彦根の近くの多賀で黄泉の国との国境に呪いをかけ続けた。このように言われると、東方の反朝廷勢力は近江の国に進軍しづらくなります。イザナキがずっと座しているわけですから。